

『構想の庭』第2号でロング・インタビューを受け、「微力だけど、無力じゃない。」と題して「富国裕民の公益資本主義を日本から発信する『彼は誰』」夜明けをめざすべき」と語りました。「次なる社会エナジーとは——京都からの提言。」と副題を冠した同誌は、ジャパンライフデザインシステムズ社長の谷口正和氏が編集主幹。「1000年の歴史と地形が洋々たる気配を形成している『悠久の都・京都』は、思想と哲学を見えざる力でインキュベートしている。未来の構想力を孵化しているに違いない。ならば、その流水を、湧水を汲み取れないか……と考えていた。その思考の中で『構想の庭』編集を着想した」と述べるインタヴューの彼は、「なんとなく、クリスタル」を上梓した1981年にJLDS社を設立のマーケティング・コンサルタント。

が、カタカナ言葉の肩書から連想するマトリックスやフローチャートといった形式知の御仁には非

連載
第26回

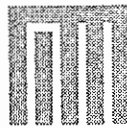
ささやかだけど、
たしかなこと。

田中康夫

You are the Hope for Tomorrow.

悠久の都・京都で新たな未来を構想する
秀逸なる雑誌

レイアウト——宗利淳一デザイン



ず。「名医の診断のように、明確に言葉には表せないが、科学的創造性を支えている身体を基盤とする知識」と「大辞林」が解説する、科学者・哲学者であったマイケル・ポランニーが提示した「暗黙知」を持ち合わせた人物です。

計6名のインタヴューの中で、はくひも白眉は、ゴリラ研究の第一人者として知られる山極壽一・京都大学総長。「昨今の社会情勢は近視眼的になっており、技術的にも能

力的にも今の社会に役立つ人材だけが求められている」が、「大学が社会に還元できるステークホルダーは『未来の人材』との発言を今回は再録しましょう。」

脳の大きさは人類の初期段階にあたる猿人で約500cc。現代人と同程度の1500ccへと進化し始めたのが約60万年前。ネアンデルタール人が20万年前に登場すると、「革新的で重大な変化が起これり」、「脳に蓄積された知識を外に発する言葉の誕生」で「知識を共有できるようになった」と語る彼

は、以下の分析を続けます。

「言葉は、知識をポータブルに持ち運べるようにし」、「進化の速度は急速に高まり」、「2000〜3000年前に文字ができた」、「人間は言葉や文字を使って自分の知識や知恵を伝えたり、物で表現したりすることで文明を発展させてきた」。「これはすべて言葉による恩恵だ」と。が、その一方で以下の危惧も吐露します。

「今、われわれはその言葉によって苦しめられ」、「言葉は、暴力となつて人に精神的な苦痛を与え」、「時に人を自殺に追い込」み、「暴言による幼児虐待も横行し」、「人間の知恵である言葉が今、逆に私たち自身を苦しめ」、「共同体として共に生きることを喜びとしていたはずのものが損なわれてしまっている」と。

理解という経験を積む中で蓄積される知識とは従来、人という生身の媒介者があつて初めて伝わるものでした。それを一変させたのがインターネット。何時でも何処でも誰でも「繋がる」安心感を齎した反面、バーチャルな世界

であるが故に実体が掴めず、不安が生まれています。

にも拘らず、冒頭の山極氏の言葉を借りれば、「技術的にも能力的にも今の社会に役立つ人材」を「促成栽培」するベクトルへと、定見無き日本の文部科学行政は舵を切っています。「人間としての社会観を基軸とした生きるためのエネルギーとなる『おもしろいこと』が発想できる『未来の人材』を育てていきたい」と繰り返して述べる彼に、国民が期待する所以でしょう。

「スポーツや音楽など五感を刺激するライブが流行」しているのは「人間が身体を取り戻そうとしている結果」。

「バーチャルな情報も身体と組み合わせ、一体化させることで人は快感」を得て、それが「生きるエネルギーになる」とも語ります。IT技術は文字情報としては「繋がる」ものの、五感を媒介して「繋がる」身体には取って代われないのです。

インターネットの後半、人間は進化の過程で「他者に自分を見るこ



とができる唯一の動物」としての特性を得たとも指摘します。チンパンジーもゴリラも五感を持ってはいるものの、「繋がり合う」という感覚は人間唯一のもので、この関係性が人間の新しい感性なのだから、「これをもう一度取り戻さないと、人間もモノ化してしまふ」のだと。

「物質はコンフリクトを起こす上、調和することもできません。ロボットはコンフリクトを克服して

いますが、調和まではできません。機械にはできない融和力が必要」。「人間は

建前と本音をうまく使い分けることができ生き物です。こういう不可思議なことができるのが人間」。「ただ単純につながっているだけでなく、そこにはしたたかなつながりがあり、それが人間らしさとなるのです」。

そして彼は、社会を牽引している筈の経済的新自由主義には「不透明な部分が多く、不安を煽るものでもあり」、「生身のコミュニティに対して、どういった幸福感を与える

かを考えることが次なるIT技術に求められる」と看破しています。

この他、小宮山宏・元東京大学総長の「プラチナ社会への挑戦」、寺島実郎・多摩大学学長の「移動と交流」が開く新時代、嘉田由紀子・元滋賀県知事の「水の国を考える」、井関利明・慶應義塾大学名誉教授の「多様性」の再検討と社会的イノベーション。「高度成長期以降我々が忘れてきたものにもう一度光を与えること」で新たな価値を生み出す取り組み」を経営方針に掲げ、「京都市内のシャッター商店街の活性化とリノベーション支援」を事業の一つとする瀧栄治郎・日本テレネット会長の支援の下、何れ劣らぬ達見が掲載された「構想の庭」は1冊500円。

消費税8%分は何処に納付しているのか、との指摘を受けて近頃はワシントン州シアトル市の表記を領収書から消去した無国籍企業Amazonでも購入可能です。因みに小生の拙きインターネットは欄外に記載のホームページでも閲覧可能です。

たなかやすお……1956年生まれ。作家。2000年から06年まで長野県知事を務める。

近著に「33年後のなんとなく、クリスタル」など

田中康夫ダイレクトメール - tanaka@nippon-dream.com URL - http://www.nippon-dream.com/